

# 21J-pm13S

ベイジアンネットワークを用いた全国高校生の医薬品使用行動の関連要因分析  
○松山 卓矢<sup>1</sup>, 堺 千紘<sup>1</sup>, 館 知也<sup>1</sup>, 野口 義紘<sup>1</sup>, 戸田 有美<sup>1</sup>, 古山 愛紗<sup>1</sup>,  
杉岡 まゆ子<sup>1</sup>, 村山 あずさ<sup>1</sup>, 井口 和弘<sup>1</sup>, 勝野 眞吾<sup>1</sup>, 寺町 ひとみ<sup>1</sup> (岐卓薬大)

【目的】学習指導要領改訂により2012年から全国の中学校で医薬品教育が開始された。しかし、発表者らが行った先行研究により、医薬品教育の効果が十分ではない場合もある可能性が明らかとなった。本研究では、より効果的な医薬品教育プログラム開発のための基礎資料を得ることを目的として、高校生の適切な医薬品使用行動の関連要因を、ベイジアンネットワークの手法を用いて検討した。

【方法】2017年5~7月に、全国の公立高等学校1年生を対象にアンケート調査を行った。対象校は無作為に抽出し、校長に調査依頼を行った結果、83校から協力が得られた(調査時期が異なったため2校は分析から除外した)。最終的に、81校から17,709名の回答が得られ、有効回答数は17,437名だった。解析には、NTTデータ数理システムが開発したソフトBayoLinkを用いた。【結果】構築したモデルから、医薬品使用行動には態度および医薬品の授業を受けたことがあるか否かの自覚が直接的に影響していることが示された。感度分析および推論の結果では、好ましい行動への変容には好ましい態度を習得することが最も大きな影響を及ぼしていた。また、医薬品使用に関する態度には、医薬品の使い方に関する知識および医薬品の授業を受けた自覚が直接的に影響しており、好ましい態度への変容には知識の習得が最も大きな影響を及ぼしていた。【考察】本研究の結果より、適切な医薬品使用行動の促進には適切な態度の習得が、また、医薬品使用に関する適切な態度の促進には正しい知識の習得が重要な役割を果たすことが示唆された。したがって、適切な態度や正しい知識の習得を促す内容を授業に取り入れることが、高校生の適切な医薬品使用行動を促す上で重要であると推察された。